

体操改革運動の後継および発展としてのメダウの体操体系について

菅井京子¹⁾

Über die Gymnastikbewegung und die Moderne Gymnastik des Medau Systems

Kyoko SUGAI

Zusammenfassung

Nachdem J.C.Guths-Muths und F.L.Jahn in den deutschen Leibesübungen eine dominante Rolle gespielt hatten, versuchte dann A.Spieß Mitte des 19.Jahrhunderts mit der Einführung der Leibesübungen an den Schulen und vollendete A.Maul schließlich diese anfängliche Aufgabe. Die Gymnastik des Spieß-Maul Systems waren erstens die freie Körperübungen, in denen die Übungen der verschiedenen Körperteile zusammengefügt wurden und zweitens die Ordnungsübungen, in denen der Marsch- und die Aufstellungsformen im gleichen Grund standen. Diese Gymnastik, die eher angesehen als rationell und wissenschaftlich war, stimmte mit der damaligen Strömung der Geisteswissenschaften überein und verbreitete sich mit der Zeit nach Übersee. Jedoch wurde diese Gymnastik schließlich scharf kritisiert, weil sie überwiegend in maschinellen und geometrischen Stilen ausgedrückte Bewegungen beinhaltete. Anfang des 20.Jahrhunderts entstand in Europa die sogenannte Gymnastikbewegung, in der man das Wesentliche des Menschseins suchte. Die Menschen begannen die naturhafte und elementare Vitalität als Lebensquell zu spüren. Ihre wachsende Aufgeschlossenheit für gesundes Leben, für die Ästhetik der menschlichen Haltung und Bewegung sowie für die Vervollkommnung der allgemeinen Bewegungen im Alltag weckte in ihnen das Körperbewußtsein und die leibliche Anschauung, die die Gestalt beseelten. Die Gymnastikbewegung war eine Behauptung auf Grund des neuen Menschenverstandes. In dieser Gymnastikbewegung findet man mehrere Strebensrichtungen, in denen man Rudolf Bode als ein Vorbild ernennen kann, der die rhythmische Gymnastik ins Leben gerufen hat. Hinrich Medau hat die Gedanken Bodes aufgenommen und daraus sein eigenes System entwickelt.

Der Zweck dieser Forschung ist es, einerseits die verschiedene Strebensrichtungen in der damaligen Gymnastikbewegung im Zusammenhang mit Medau System, deutlich zu machen. Andererseits ist es, die Rolle Medaus sowohl als Nachfolgers Bodes als auch als eines eigenständigen Gymnasten, der die Entwicklung gefördert hat, ins Licht zu bringen.

Schlüsselwörter : Gymnastikbewegung, Moderne Gymnastik, Hinrich Medau

1) スポーツ開発・支援センター

はじめに

グーツムーツ (J.C.Guts-Muths, 1759-1839) やヤーン (F.L.Jahn, 1778-1852) がドイツ近代体育の先駆的役割を果たした後、学校への体育の導入は、ドイツ国内の体育論争や抗争を経て、19世紀中頃、シュピース (A.Spieß, 1810-1858) によって始められ、マウル (A.Maul, 1829-1907) によってほぼ達成された。このシュピース=マウル方式の体操は、人間の身体運動を部分運動に分割し、それらをひとつひとつ学習させ、いろいろに組み合わせ、全体的な連続運動に仕立てていく徒手体操 (Freiübungen) や、同様の発想による整列・行進を中心とする秩序運動 (Ordnungsübungen) を主要内容とするもので、自然科学万能の合理的精神に基づき、号令に合わせて一斉に行われる幾何学的・形式的な集団運動であった。これは、時代の精神とも相俟って、ヨーロッパ、アメリカ、日本へと伝わり一世を風靡した。しかし、その後、シュピース=マウルの体操は、あまりに形式的、人為的であり、関節人形運動であるとか、操り人形運動であるという批判を受けるようになり、新しい体操を求めて改革運動が起こった。20世紀の初め頃ドイツを中心にヨーロッパに起こった体操改革運動 (Gymnastikbewegung) がそれである。人々は、自然のままの根元的なバイタリティーを生命の泉と認め始めた。健康な生命に対する、人間の姿勢や動きの美しさに対する、日常生活の動きに対する人々の感受性が鋭敏になり、形に魂を吹き込むような身体意識や身体観が呼び起こされた。これは、世紀末に現れた人間の本质への問いなおしであり、そこから生まれた新しい人間理解に立った主張のひとつであった。この体操改革運動には、一般にいくつかの関連しながらも異なる領域が認められている。体操改革運動の中核的な位置を占めるルドルフ・ボーデ (Rudolf Bode, 1881-1970) のリズム体操も、そのひとつである。そして、

ヒンリッヒ・メダウ (Hinrich Medau, 1890-1974) は、従来、ボーデの弟子として、ボーデの体操の後継者として紹介されてきた^{16), 18), 28)}。しかし、メダウの体操体系を調べてみると、ボーデの体操を中心におきながらも、その他多様な内容を含んでいることがわかる。

本研究では、20世紀の初め頃ドイツを中心にヨーロッパに起こった体操改革運動における体操分類を整理し、『新しい体操—メダウの教授法』(1967)²¹⁾を手がかりに、メダウの体操体系における教材を検討し、メダウは体操改革運動の一領域のみの後継者でなく、より多くを後継し、さらなる発展の糸口を提供したということを明らかにしたい。

I. 体操改革運動における体操分類について

20世紀の初め頃ドイツを中心にヨーロッパに起こった体操改革運動には、多くの多彩な活動が含まれている。すでに我が国でも、大谷武一の『新しい体操への道』(1930)²⁵⁾等^{1), 24)}の中で、それらの活動については早い時期から紹介がなされている。そして、その後の体操史研究により、分類が試みられている。

アルフレッド・ガイスラー (Alfred Geißler) は、『改革教育運動当時の学校における身体教育』(1978)⁵⁾の中で、最も簡潔に、次のような3つの分類を行っている。すなわち、衛生的・生理学的・教育的方向の体操、リズム的・教育的方向の体操、そして、ダンス的・教育的方向の体操である。要約すると次の通りである。

1. 衛生的・生理学的・教育的体操・・・人間の身体感覚を呼び覚まし、経済的な姿勢や動きの自覚を促すことを重視する (活躍した人物) ベス・メンゼンディーケ (Bess Mensendieck), ヘドヴィヒ・ハーゲマン (Hedwig Hagemann), ドーラ・メンツラー (Dora Menzler), ミュラー (I.P.Müller), ハンス・ブーレン

(Hans Suren)

2. リズム的・教育的体操・・・人間の活力と意志力を運動のリズムや表現力によって発達させることを重視する

(活躍した人物) ダルクローズ (Dalcroze), ルドルフ・ボーデ (Rudolf Bode)

3. ダンス的・教育的体操・・・人間の創造力を、運動表現によって発達させることを重視する

(活躍した人物・学校) ルドルフ・フォン・ラバン (Rudlf von Laban), ドーラ・メンツラー (Dora Mentzler), ローエラント (Loheland-Schule)

また、稲垣正浩は、『最新スポーツ大辞典』(1987)¹⁸⁾ 新体操の項で、体操改革運動における体操を4つに分類している。機能を重視する体操、表出 (Ausdruck) を追求する体操、リズムを中心にすえた体操、そしてダンス的発想に基づく体操である。要約すると次の通りである。

1. 機能を重視する体操・・・医学や解剖学や生理学の最新の成果を体操の中に応用しながら、身体育成をめぐる機能的効果の合理性を軸にする健康の保持・増進に役立つ体操の体系化の試み

(人物) スウェーデン体操の創始者といわれるリング (P.H.Ling, 1776-1839) を初めとし、チューリン (G.Thulin), テルングレン (M.Törngren), クヌッセン (K.A.Knudsen), ファルク (E.Falk), ビョルクステン (E.Björkstén), ミュラー (J.P.Müller), ニールス・ブック (N. Bukh, 1880-1950)

(体操名) 医療体操, 機能体操

2. 表出を追求する体操・・・表出に基づく運動によって初めて人間の身体と精神と情緒は一体となって発達するというデルサルトの学説に基礎をおく

(人物, 学校) デルサルト (F.Delsarte, 1811-1871), マッケイ (S.Mackaye),

ステビンス (G.Stebbins), カルマイヤー (H.Kallmeyer, 1881-?), メンゼンディーク (B.Mensendieck, 1864-1959), ギンドラー (Gindler), メンツラー (D. Menzler), ローエラント (Loheland-Schule), ハーゲマン (Hagemann), ギュンター (Günther), ボーデ (Rudolf Bode, 1881-1970), ヴィグマン (M. Wiegmann, 1886-1973)

(体操名) 表出体操, 芸術体操

3. リズムを中心にすえた体操・・・音楽リズムと体操リズムとの関連、および相互促進の理論に基づく

(人物) ダルクローゼ (J.Dalcroze, 1865-1950), ボーデ (Rudolf Bode, 1881-1970), ヒンリッヒ・メダウ (Hinrich Medau, 1890-1974)

(体操名) リズム体操, 表出体操

4. ダンス的発想に基づく体操・・・伝統にしばられた古典バレエを否定し、自然で調和のとれた流れるような運動を普及させ、感情のおもむくままの表象像や現実的な表象像を求めて、自由な、即興的な運動を構築していく

(人物) イサドラ・ダンカン (I.Duncan, 1878-1927), エリーザベット・ダンカン (E.Duncan, 1874-1948), ラバン (R. Laban, 1879-1948), ヴィグマン (M. Wiegmann 1886-1973), パルッカ (G. Palucca)

(体操名) ダンス体操

また、板垣了平も、『体操論』(1990)¹⁷⁾ の中で、機能向上を第一の目的とした体操、表出的な方向の体操、リズム的方向の体操、そしてダンス的な方向の体操というように4つに分類している。以下の通りである。

1. 機能向上を第一の目的とした体操

(人物) リング (P.H.Ling), メンゼンディーク (B.Mensendieck), ハーゲマン (Hagemann), ギュンター (Günter), ランガード (Langgaard), グラーサー

(Glaser), ライヒマン (Reichmann)

(体操名) 機能体操, 保健体操

2. 表出的な方向の体操

(人物) デルサルト (F.Delsarte), ステバン (G.Stebbins), カルマイヤー (Kallmeyer), ローデン (Rhoden), ギントラー (Gindler), メンツラー (Menzler)

3. リズミ的な方向の体操

(人物) ダルクローズ (J.Darcrose), ボーデ (R.Bode)

(体操名) リズム体操 (Rhythmische Gymnastik)

4. ダンス的な方向の体操

(人物) ダンカン (I.Dancan), ラバン (Laban), ウィグマン (Wigmann), パルカ (Palluca), レックス (M.Lex)

以上みてきたように、体操改革運動の中には、一般に3つの領域が認められている。すなわち、機能、リズム、そしてダンスに関する領域である。さらに、稲垣、板垣の場合、表出の領域が加えられている。しかし、表出については、表出に基づく運動によって初めて人間の身体と精神と情緒は一体となって発達するというデルサルトの表出体操の基本的な心身一元論的な考え方が中心になっており、これは、前時代の機械的合理性の考え方、人間を機械のように扱うことへの反省から強調されたもので、他の全領域に共通にみられる特徴である。表出の領域に関する人物として、デルサルト、ステビンズ、カールマイヤーの他にしばしば他領域の代表的人物でもあるメンゼンディーク、ボーデ、ウィグマン等が挙げられるのは、このような事情からであると考えられる。デルサルト (F.Delsarte, 1811-1871) は、女子体育論の提唱者クリアス (P.H.Clias, 1782-1854) がパリで活躍していた頃、同じくパリで声楽の勉強をしていたが、誤った練習のため声を潰してから、自然的な運動の法則を研究してこれによって多くの子弟を教育し始めた。彼の業績は、アメリ

カ人ステバン等によって引き継がれ、彼らはその研究をまとめ、既に1893年『表現の体系』と題する著書をニューヨークで出して²³⁾ おり、この領域の研究は、体操改革運動が起こる以前に既に大成の域に達していた。そして20世紀の初めに起こった体操改革運動の多くの体操家たちに大きな影響を与えた。例えば、メンゼンディーク (B.Mensendieck, 1864-1959) は、デルサルトの弟子であるステバンの影響を受けて、特に婦人の身体練習に役立つ一連の体系をアメリカで発展させそれをドイツにもたらし²⁶⁾。ボーデ (R.Bode, 1881-1970) については、彼の体操の運動法則すなわち解緊、振動、緊張、表現のうち表現運動の源流はデルサルトにあるといわれている²⁾。ラバン (R.Laban, 1879-1948) の舞踊体操もまた、その淵源は結局デルサルトの思想から発しているといわれている。⁽²⁷⁾ ゆえに、ここでは、体操改革運動の中に現れた体操の領域を、それぞれ表出的な要素を共通に含みもつことを認めたいうえで、メンゼンディークの機能体操を代表とするような衛生学的・生理学的方向の体操、ボーデのリズム体操を代表とするようなリズムの方向の体操、そしてラバンのダンス体操を代表とするようなダンス的・芸術的方向の体操の3つで捉えることにする。

そして、ヒンリッヒ・メダウ (Hinrich Medau, 1890-1974) は、従来、ボーデの弟子として、この体操改革運動の3つの領域のうちのひとつの領域であるボーデのリズム体操の後継者として紹介されてきた^{16), 18), 28)}。

II. メダウの体操体系について

ヒンリッヒ・メダウは、ドイツ三大体操学校のひとつといわれるメダウシューレの創立者であり、著名な体操家である。

メダウは、1890年5月13日に北部ドイツのシュレスビヒ-ホルシュタイン州に生まれた。農家の六男として、彼は、子ども時代を9人の兄弟と共に、自然の豊かな環境の

中で育った。彼は、旅回りのサーカスや祭りや年の市が大好きで、そんな中で、音楽や民謡や民族舞踊や賛美歌に影響を受けた。もともとメダウは、音楽家になるつもりであったが、彼の両親に反対され、小学校教師になることにした。その養成課程終了後、彼はリスボンのドイツ人学校に赴任した。そこでは同時に公使館教会のオルガン奏者としても勤めた。3年間、彼はリスボンで教鞭をとった。ポルトガルの参戦後、彼は、実科高等学校と大使館教会で彼の活動を続けるために、マドリッドに移った。スペインとポルトガルは、生活、音楽、リズム、ダンス、そして遊びの文化を通して彼に強い印象を与えた。当時、メダウは、ルドルフ・ボーデの著した『リズムと身体教育』を読み、強く感銘を受けた。そして、ミュンヘンのボーデのところではリズム運動を勉強するために帰国した。ボーデの学校で学士号を取得した後、さらにミュンヘン大学やベルリン大学で学んだ。ボーデのもとで、彼は、7年間、講習や講演そして実演会を通して、運動教育の普及に努めた。彼は、国内だけでなく、海外にも招聘され、1928年にはニューヨークのコロンビア大学で夏期セミナーを行った。その頃ニューヨークではバスケット・ボールのゲームが盛んに行われ、メダウの目にもとまった。それが切っ掛けとなって、後に彼はボール体操を考案することになる。ドイツに帰国後、1929年に、彼はボーデの学校から独立し、体操女教師養成所をベルリンに設立した。

1967年に、彼は、その妻ゼンタ・メダウ (Senta Medau) および協力者であるユタ・ホラー・フォン・デア・トレンク (Jutta Holler-von der Trenck) とともに『新しい体操 (Moderne Gymnastik) —メダウの教授法』(1967)²¹⁾ を出版し、彼の体操の理論と指導法を明らかにした。その中では、体操の研究領域として次のようなものが挙げられている。

・基本運動 (Grundformen der Bewe-

gung)

- ・姿勢教育 (Haltungserziehung)
- ・動きの発展 (Bewegungsentwicklung)
- ・空間における動き (Bewegung im Raum)
- ・一連の動きの構成とダンス (Bewegungsgestaltung und Tanz)
- ・器官体操 (Organgymnastik)
- ・動きの発展の基本型 (Grundformen der Bewegungsentwicklung)

メダウは、体操の目的として次の三つの柱を立てている。

1. 健康
2. よい形態と姿勢
3. 目的に適した洗練された動き

これらの目的を達成するために、彼は教材を次の4つの項目にまとめ、体操を体系づけている²⁸⁾。

1. からだづくり (Körperbildung)
 - 器官体操—呼吸と姿勢の修練
2. 動きづくり (bewegungsbildung)
 - ・基本運動 (歩く、走る、振る、跳ぶ、そして、はずむから始めて)、その変化、発展
 - ・手具を補助として
3. 一連の運動の構成 (Bewegungsgestaltung)
 - ・基本運動を形態、空間、時間、力勢などの観点から変化、発展させ、組み合わせ構成する
 - ・フォークダンスや社交ダンスからの一連の運動やモチーフを用いて
4. 運動技能 (Bewegungsleistung)
 - 技能は目標ではなく、成果として

これらの教材を検討してみると、先ず、からだづくりの項目の中の器官体操は、メダウの体操体系の特色のひとつであり、彼はこの器官体操をミュンヘンの呼吸器科の医師ルートヴィヒ・シュミット (Ludwig Schmitt) の協力を得てまとめた。これは、大筋群を伸展させるような姿勢や運動と呼吸との組み合

わせを特徴とするものである^{21),31)}。メダウは、器官体操をからだづくりの課題の中に挙げているが、教授法の各所で、これから姿勢づくりや動きづくり（運動形成）へと発展させることのできる最も基礎的なものであると強調している。この器官体操は、体操改革運動のひとつの成果であるメンゼンディークの機能体操の流れを汲むものとみることができる。次に、動きづくりについては、いわゆる、ボーデのリズム体操を後継し、有機的な動きを重視する動きづくり、すなわち運動形成をねらいとする体操を展開したものである。一連の運動の構成は、それを作品として作ったり、練習する中で、リズムカルでダイナミックで生き生きとした表現豊かな動きを身につけようとするもので、これも、動きづくり（運動形成）の課題の発展として捉えることができる。同時に、これは、また、一連の運動を作品として創作するという場合においては芸術的課題でもある。これはボーデのリズム体操の手法であるばかりでなく、ラバンのダンス体操の手法でもある。メダウは、一連の運動やダンスの即興や構成など、ラバンのダンス体操の流れを汲む教材も多く取り入れている。そして、運動技能について、メダウは女性のスポーツ、技能追求や競技には、消極的で「技能は体操の目標ではなく、成果である」^{21),28)} といっている。しかし、やはりこれは目標となりうるものであると思われる。メダウは動きづくりの補助としてボール、棍棒、輪などの手具を用いたのであるが、これと運動技能や芸術性の追求が結びつけられ、意図せず、全く新しい分野、すなわち新体操競技への道を切り開いた。

ヒンリッヒ・メダウは、従来、ボーデの弟子として、ボーデの体操の後継者あるいは同じリズム的志向のグループに属する者として紹介されてきた^{7),8),16),17),18)}。しかし、メダウの体操体系を調べてみると、次のようなことがわかった。彼は、ボーデのリズム体操を後継し、有機的な動きを重視する動きづくり

（運動形成）の体操を展開したが、それだけでなく、彼は、体操改革運動の他の多くの成果、すなわちメンゼンディークの機能体操やラバンのダンス体操などの成果をも受け継いだ。メンゼンディークの機能体操の流れを汲むものとして、彼は、医師等の研究の援助を受け健康に関する知識をまとめて、器官体操を考案した。また、彼は、ラバンのダンス体操の手法と同じく、一連の運動の即興や構成にも重点をおき、体操体系を確立した。加えて、彼は、ボール、棍棒、輪などの手具を体操に導入し、手具体操の体系化も行い、全く新しい分野、すなわち新体操競技への道を開いた。

以上のように、メダウは、20世紀の初め頃ドイツを中心にヨーロッパに起こった体操改革運動の一領域の後継者ではなく、改革運動全体の成果の多くを受け継ぎ、発展させ、また競技スポーツという新しい要素を加え、体操を次の時代に橋渡しした。その功績は大変に大きいものであったといえる。

おわりに

本研究では、先ず、20世紀の初め頃ドイツを中心にヨーロッパに起こった体操改革運動の全体像をつかむべく、改革運動における体操分類を整理した。体操改革運動は、それぞれ表出的な要素を含みもちながらも、メンゼンディークの機能体操に代表されるような衛生的・生理学的方向の体操、ボーデのリズム体操に代表されるようなリズム的方向の体操、そしてラバンのダンス体操に代表されるようなダンス的・芸術的方向の体操の3つの領域で捉えることができる。ヒンリッヒ・メダウは、従来、ボーデの弟子として、ボーデのリズム体操の後継者あるいは同じリズム的志向のグループに属する者として紹介されてきた。しかし、メダウの体操体系を調べてみると、彼は、ボーデの体操を中心におきながらも、体操改革運動の他の多くの成果、すなわちメンゼンディークの機能体操やラバンの

ダンス体操などの成果をも受け継ぎ、体操体系を確立したことがわかる。加えて、彼はボール、棍棒、輪などの手具を体操に導入し、手具体操の体系化も行い、全く新しい分野、新体操競技への道を開いた。メダウは、体操改革運動の一領域の後継者ではなく、改革運動全体の成果の多くを受け継ぎ、発展させ、また競技スポーツという新しい要素を加え、体操を次の時代に橋渡ししたといえる。

引用・参考文献

- 1) 浅井浅一・大段員美 (1958) 体操概論. 杏林書院 体育の科学社:東京, pp.105-137.
- 2) 浅井浅一・大段員美 (1958) 体操概論. 杏林書院 体育の科学社:東京, p.136.
- 3) Bollnow, O.F. (1967) Gestaltung als Aufgabe. In: Ausschluß Deutscher Leibeserzieher (Hrsg.) Die Gestaltung. Karl Hofmann: Schorndorf, pp.17-38.
- 4) Fischer-Münstermann, U. (1967) Versuch einer Methodik zur Rhythmischen Gymnastik. Die Leibeserziehung 2: pp.46-48.
- 5) Geißler, A. (1978) Die Körpererziehung in der Schule zur Zeit der reformpädagogischen Bewegung, Kastellaun/Hunsrück: Henn, pp.20-28.
- 6) Grupe, O. (1967) Bewegung und Bewegungsgestaltung in pädagogischer Sicht. In: Ausschluß Deutscher Leibeserzieher (Hrsg.) Die Gestaltung. Karl Hofmann: Schorndorf, pp.39-56.
- 7) 浜田靖一 (1976) 新しい体操への出発点. 泰流社:東京, pp.25-41.
- 8) 浜田靖一監 (1987) 体操ハンドブック. ビネバル出版:東京, pp.8-12.
- 9) Holler-von der Trenck, J. (1969) Grundsätzliche Aufgabe und Möglichkeiten der Modernen Gymnastik. Leibesübungen 5: pp.11-14.
- 10) Holler-von der Trenck, J. (1969) Zur Didaktik und Methodik der Modernen Gymnastik --Lehrweise Medau. Leibesübungen 10: pp.8-11.
- 11) Holler-von der Trenck, J. (1971) Grundformen der Gymnastik--Sinn, Bedeutung und Übungsmöglichkeiten. Leibesübungen 1: pp.4-7.
- 12) Holler-von der Trenck, J. (1971) Theorie der Gymnastik 3. Leibesübungen 7: pp.3-4.
- 13) Holler-von der Trenck, J. (1971) Theorie der Gymnastik 4. Leibesübungen 9: pp.3-6.
- 14) Holler-von der Trenck, J. (1971) Theorie der Gymnastik 5. Leibesübungen 11: p.21.
- 15) Holler-von der Trenck, J. (1972) Entwicklungsanstöße für die Moderne Gymnastik durch Wettkampf- und Jazzgymnastik. Deutsches Turnen 1: pp.3-4.
- 16) 板垣了平 (1975) 体操. ポプラ社:東京, pp.12-28. 36-42.
- 17) 板垣了平 (1990) 体操論. アイオーエム:東京, pp.31-33.
- 18) 稲垣正浩 (1987) 新体操. 岸野雄三編 最新スポーツ大辞典. 大修館書:東京, pp.448-452.
- 19) 邦正美 (1954) 舞踊. 杏林書院 体育の科学社:東京, pp.38-95.
- 20) 邦正美 (1979) 動きのリズム. 日本教育舞踊研究所:東京, pp.54-58.
- 21) Medau, H., Medau, S. und Holler-von der Trenck, J. (1967) Moderne Gymnastik--Lehrweise Medau. Verlag Pohl-Druckerei und Verlagsanstalt: Celle
- 22) Medau, H. (1967) Die Lehre der Gestaltung. In: Ausschluß Deutscher Leibeserzieher (Hrsg.) Die Gestaltung. Karl Hofmann: Schorndorf, p.195.
- 23) 中村秋一 (1925) ドイツ舞踊文化. 人文閣:東京, pp.145-146.
- 24) 二宮文右衛門・今村嘉雄・大石峯雄 (1933) 体育の本質と表現体操. 目黒書店:東京, pp.24-39.
- 25) 大谷武一 (1930) 新しい体操への道. 目黒書店:東京, pp.49-130.
- 26) 大谷武一 (1930) 新しい体操への道. 目黒書店:東京, p.57.
- 27) 大谷武一 (1930) 新しい体操への道. 目黒書店:東京, p.96.

- 28) Rothenberg, G. (1965) Hinrich Medau zum 75.Geburtstag. Leibesübungen 5: pp.3-7.
- 29) Seybold, A. (1967) Zur Didaktik und Methodik des Gestaltens in der Leibeserziehung. In: Ausschluß Deutscher Leibeserzieher (Hrsg.) Die Gestaltung. Karl Hofmann: Schorndorf, pp.57-76.
- 30) Seybold, A. (1976) Schulgymnastik I. Limpert: Bad Homburg v.d.H, pp.7-8.
- 31) 菅井京子 (1989) メダウの体操体系における器官体操について. 大阪成蹊女子短期大学研究紀要 (No.26): 大阪
- 32) 菅井京子 (1991) ラバンセンターにおける運動教育についての一考察. 大阪成蹊女子短期大学研究紀要 (No.28): 大阪
- 33) 菅井京子 (1992) ルドルフ・ラバンについて—『ルドルフ・ラバン』の伝記より. 大阪成蹊女子短期大学研究紀要 (No.29): 大阪
- 34) 菅井京子 (1993) ルドルフ・ボーデについて—『ルドルフ・ボーデ, その生涯と業績』より. 大阪成蹊女子短期大学研究紀要 (No.30): 大阪
- 35) 菅井京子 (1998) 体操改革運動 (Die Gymnastikbewegung) について. 大阪成蹊女子短期大学研究紀要 (No.35): 大阪
- 36) 滝沢かほる・板垣了平 (1982) 体操の課題に関する研究—メダウの体操体系における Bewegungsentwicklung と Bewegungsgestaltung について. 日本体育学会第33回大会発表資料.
- 37) 滝沢かほる・板垣了平 (1992) 体操における姿勢教育について. 日本体育学会第43回大会発表資料.